

史を紐解く作業を行う場合、当時の「社会」がどのようなものであったのかを、可能な限り体系的に理解することが重要な意味を持つ。

そうした意味で本書は、帝国主義下における日本社会の様相を非常に広範な視点から記述しており、満洲研究に取り組む際には多様な枠組みを提供してくれるはずである。政府や軍をはじめ、メディア、知識人、企業、地域社会、農民など、あらゆる主体があらゆる形で「満洲国」という壮大なプロジェクトに参加するという文字通り「総動員帝国」であった当時の日本を知ることによって、多くの問題群が浮かんでくる。近代化の産物としての満洲は、ネーション形成とナショナリズムといった国家論的な視点や、総動員の過程にみられた社会運動史的な視点、そして戦後社会にもたらされた引揚者や残留日本人たちのアイデンティティ問題など、実に多様なテーマを内包しているわけである。

関連文献

- 蘭信三, 1994, 『「満洲移民」の歴史社会学』行路社
——編著, 2008, 『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版
藤原書店編集部編, 2006, 『《新装版》満洲とはなんだったのか』藤原書店
坂部晶子, 2008, 『「満洲」経験の社会学—植民地の記憶のかたち』世界思想社

III 研究会紹介

不老会（方法論研究会）

名古屋大学大学院環境学研究科博士後期課程
木田勇輔

先輩方から受け継いできた不老会も、立ち上げから早数年ということになるのであろうか。こういう書き出しになってしまったのは、実は筆者はすでに不老会の設立当時を知らない世代の大学院生だからである。2008年度から不老会の部会として立ち上げられた「方法論研究会」は、1～2ヶ月に1回のペースで読書会・研究会を続けており、今回このスペースをお借りして、その現況をご紹介させていただきたいと思う。

方法論研究会は、社会科学、特に実証系研究における研究方法の基礎を学びなおすために立ち上げられた研究会である。私たち大学院生は普段自分の研究テーマを追いかけるのに夢中（必死?）であり、いざ研究報告という際になると、「その現象をどのような枠組みを使って説明するのか」「変数はどうやって測るのか」など、研究の土台についての議論をすっかり忘れてしまいがちである。とりわけ因果関係に関する説明の欠如は、時として研

究にとって致命的な欠陥になりうるが、大学院生レベルではしばしば見落とされてしまい、気づいた時には時すでに遅しということも多い。

ところで、海の向こうのアメリカ社会科学界では、政治科学者たちを中心に社会科学方法論に関する論争が近年巻き起こっているという。いわゆる KKV 論争である。その発端は King ら (1994=2004、筆者 3 人の頭文字を取って KKV と呼ばれている) による *Designing Social Inquiry* (以下、DSI) であり、その批判的論考を集めた論文集として Brady ほか (2004=2008) の編による *Rethinking Social Inquiry* がある (以下、RSI)。さらに社会学からはブール代数分析で有名な Ragin がこの論争にかかわる形で、自らのファジー集合分析を提示している (Ragin 2008)。幸いなことに、日本では最近になって勁草書房が方法論関連の邦訳を数多く出版し始めており、気軽に社会科学方法論の議論に触れることができるようになった。

読書会では KKV 論争に関連する文献を中心に議論を行ってきた。やはり議論的となったのは、定量的分析と定性的分析の方法論の間にある溝についてである。誤解を恐れずに強引に議論の要点をまとめておこう。KKV らの議論は研究デザインが曖昧になりがちな定性的研究に対して、回帰分析的な発想を用いることで解決しようとする試みである。私たち大学院生にとっては、KKV の提言は先達の「実践的なアドバイス」として大変有益であった。しかし、KKV の議論は因果プロセス分析など定性的研究独自の強みを軽視したり、主流派定量研究の手法をその限界にも関わらず無批判に定性的研究に当てはめようとしたりしている側面もあり、これらの諸論点については RSI で大きな批判を浴びた。なお、定量と定性の溝を乗り越えようとする試みの一つに Ragin によるファジー・セット分析があるが、実用性という意味ではまだまだ課題を残すのではないかというのが私たちのこれまでの結論である。

今年度からは新規のメンバーの参加も考え、一度これまでの議論を整理して、参加者で議論しながら今後の方向性を考えていく予定である。個人的には定性的研究における因果プロセス分析の精緻化や「時間的次元」についての議論 (Pierson 2004=2010 など) も視野に入れていきたいと考えている。また、参加者による研究報告も随時行っている。ご関心のある方はぜひぜひご参加ください。

Henry E. Brady , David Collier eds., 2004, *Rethinking Social Inquiry: Diverse Tools, Shared Standards*, Rowman & Littlefield Pub Inc. (=2008, 泉川 泰博・宮下明聡訳『社会科学の方法論争—多様な分析道具と共通の基準』勁草書房.)

King, Gary, Robert Keohane, Sidney Verba, 1994, *Designing Social Inquiry: Scientific Inference in Qualitative Research*, Princeton Univ Press. (=2004, 真淵勝監訳『社会科学のリサーチ・デザイン—定性的研究における科学的推論』勁草書房.)

Pierson, Paul, 2004, *Politics in Time: History, Institutions, and Social Analysis*, Princeton University Press. (=2010, 粕谷祐子監訳『ポリティクス・イン・タイム—歴史・制度・社会分析』勁草書房.)

Ragin, Charles, 2008, *Redesigning Social Inquiry: Fuzzy Sets and Beyond*, University of Chicago Press.